

古文読解へのアクセス

第二講・主語の発見

「練成問題」主語を二重線で指摘し、省略部にはくを^レ入れ、会話に「^レをつけよ無名といふ琵琶の御琴を、上のく^レ定子様ノモトへ持て渡らせ給へるに、「く^レ他人ガ見などしてかき鳴らしな^レどす」と言へば、く^レ私ハ弾くにはあらで、緒などを手まさぐりにして、「これが名よ、いかにとか」と聞こえさするに、く^レ定子様ガ「く^レコレ(琴)ノ名ハただいとはかなく、名もなし」と、宣はせたるは、なほいとめでたしとこそおぼえしか。

【現代語訳】

「無名(むみょう)」という名前の琵琶を、帝が定子様の所へ持っていらつしゃいましたので、

「私も試しに鳴らしたりなんかするんですよ」

と人が言うものだから、(私もやってみようと思って)私も、弾くわけではなく絃を手でもてあそんで。

「この琵琶の名前は、何というんでしたかしら。」

などと申し上げると、定子様が

「どつにも取るに足らないもので、名も無いのです」

とおつしゃつたのは、やっぱりさすがに定子様と思えるくらいにすばらしいと思いました。

(琵琶の名前は「無名」というが、それと「名も無い」つてのをかけているから。)

主語や目的語の省略が多くあるのをお分かりいただけましたか。きっと、こりゃよくわからないのではないかと思ひながら作りました。意地悪ではなくて、古文は読みにくい^レのだから、しっかりと話し手や話題の人物は何か、何について話しているのかなどをき把握して欲しいと思つて作ってみました。

みなさん、ここまで丁寧に必要な^レはないですが、主語がわからないときはしっかりと逐次確認してください。前後の関係を見る、敬語を見る、などなど様々ありますよ。ではでは。